



### 超高齢少子化問題とエコシステム

2017年を迎えました。いよいよ超高齢少子化多死時代が近づいてきました。これから高齢者の割合が年々増えていきます。そして、その高齢者を支える若い人たちの割合は減っていきます。その中で、きわめて多くの人々が亡くなる時代となります。社会保障費は高騰し、都市部の急性期病院は慢性的にベッド不足状態となるでしょう。救急搬送の数がさらに増える中、救急医療の現場は混乱していき危険性が高くなります。

在宅医療の視点から見ると、圧倒的に人・金・物が不足してくるでしょう。普通に考えれば負け戦です。例えるならば、300人で100万人を相手に戦いを挑むような心境です。半年から1年という短期決戦ではありません。2025年から2040年にかけての長期戦が待っています。どうしたら良いのでしょうか？

少ない人数で、大きな困難を解決するための方策として、1つの団体（企業）だけで対処するのではなく、関連する複数の団体（企業）がパートナーシップを組みながら総力をあげるしかないと考えます。これは、超高齢少子化多死問題をエコシステムとして捉える戦略です。

この社会課題解決に向けて、地域包括ケアシステムが導入されました。そして、各地域の資源マップが作成され、安心して老いることができる社会を目指しています。しかし、まだ十分とはいえません。活きたシステムにならなければ、絵に描いた餅のままです。それぞれの組織で、肩書きを持つ人たちだけが年に1-2回集まるだけではなく、生活を送っている住民1人1人の参加がなければ、実際には活きたシステムにはなりません。どうしたら、実践を伴う活きたシステムに変革できるのでしょうか。これが課題です。

課題解決の1つは、超高齢少子化多死問題という社会課題の認知度を高めていくことです。一部の人しか知らない社会課題ではなく、これからの時代、限られた人材で相互に助け合っていく必要性を、看取りを避けてきた人たちにも自分のこととして考えることができれば良いでしょう。認知度を上げるキャンペーンを企画したいと思います。エンドオブライフ・ケア協会のイメージカラーであるオレンジから濃紺へのグラデーションを用いたリボンなども提案してみたいと考えています。

もう1つの課題解決として、つながりの希薄化の改善を挙げます。従来は、自治会が地域のつながりの役割を担っていましたが、高齢化、個人情報保護、個人の自由の尊重など、各地域での世帯間や家族間のつながりは、近年希薄化の一途を歩んでいます。従来の自治会の役割だけでは、つながりの強めることが難しくなってきました。年に1回のイベントというつながりではなく、日常的なつながりを意識したとき、コミュニティへの仕掛け方も変わってくると思います。サッカークラブチームの持つ社会貢献の1つとして、このつながりを強める効果を期待して、今年は動いてみたいと思います。2025年まであと8年、今年はさらに活動を加速していきたいと思います。

小澤竹俊

### 新刊の案内

新刊“人生の意味が見つかるノート”が出版されます。看取りという苦しみを通して、人は実に多くのことを学びます。すると、苦しむ前には気づかなかった大切なことに気づいていきます。クリニックで実践してきたディグニティセラピーをもとに、人生の意味が見つかるための問いを紹介しました。困難を抱えながらも人は強くなれます、そして、何より優しくなれます。



### 2016年の実績

2016年1月から12月までの実績が出ました。開設して初めて1年間（1-12月）のまとめで300人を越える在宅看取り実績（311人）となりました。特に特筆すべきは年末年始の新規の依頼と看取り実践です。12月27日から29日の3日間で9名の新規訪問依頼を受けました。そして、12月31日から1月2日で5人の在宅看取りがありました。年末年始であっても、このように関わる事ができる多職種連携のチームが地域にあることを、心から嬉しく思います。これからも誠実に地域のニーズに応えられるように、連携先の事業所とともに活動して参ります。

### 診療実績

	2006-2015年	2016年1月~9月	2016年10月	2016年11月	2016年12月	2016年計	総計
訪問回数	41,344	7,182	735	795	796	9,508	50,852
自宅永眠	1,514	194	17	21	23	255	1,769
施設永眠	162	41	5	7	3	56	218
在宅(自宅+施設)	1,676	235	22	28	26	311	1,987
病院永眠	403	68	2	4	10	84	487